Jour. Agri. Sci., Tokyo Univ. of Agric., 51 (1), 27-36 (2006)
東京農大農学集報，51（1），27-36（2006）

北京・頤和園の景観構成に見られる江南景観の影響

祝　　丹*・神藤正人・蓑茂寿太郎****

（平成17年11月22日受付/平成18年3月10日受理）

要約：本研究は北京・頤和園の成立に影響を与えたとされる江南の景観について相互の関係を研究したものである。つまり皇帝が当園を設計し，造営する際に，江南の名勝や景観の何を，どのように参考にしたかを明らかにしようとしたものである。研究の方法は，関連する一次文献，歴史資料，既往研究，詩集絵図などの文献調査を中心とし，現地調査により実態の確認作業を進めた。具体的には，1）江南の名勝風景地からの影響，2）江南名園からの影響，3）江南建築からの影響，4）江南水郷風景からの影響，5）江南市街地からの影響を順に明らかにしたものである。このようにして，5つの側面から頤和園の景観構成に見られる江南景観の影響を解明した。

キーワード：頤和園，景観構成，江南景観，中国庭園，乾隆帝，南巡

1.　研究の目的・方法

本研究の対象である頤和園（1751～現在）は庭園として250年以上の歴史を数えるが，その形成過程は「瓮山・西湖期」（1271～1751），「清漪園期」（1751～1888），「頤和園期」（1888～現在）と大きく3つの時代に分けてみることができる[1]。中国の皇帝が関与した最後の古典皇室庭園の代表作として常に造園界の注目を集めている。長い歴史，壮大な面積，優れた造園意匠から，1961年に中国政府は，ここを第一次全国重点保護施設の一つに指定し，続いて1998年12月にはユネスコの「世界文化遺産」の登録を受けている。この頤和園を対象にしては，さまざまな研究[2,3]がなされているが，景観構成に関しては，ほとんどが杭州にある西湖との関連についてであり[4,5]，本論で試みるような，江南の名勝，庭園，建築などの広範な文化景観が，頤和園の造営にどこまでどのように影響したかについては論じていない。そこで，本研究は世界的ランドスケープ遺産としての頤和園が構築されるに当たり，その景観構成のモチーフを探し出すべく，江南の景観，庭園，さらに造園技法を考察するものである。これにより，取り入れた構成要素の原型を明らかにすると共に，皇帝が頤和園を設計，造営する際に抱いていた江南の名勝や景観への評価を知り，中国のランドスケープデザインにおける地域学習性の研究を試みるものである。

本研究は一次文献の調査，絵図調査，現地調査により研究を進めた。なお，ここで言う一次文献の主なものは『南巡盛典』[6]である。これは，乾隆帝の南巡を記録したもので，乾隆31（1766）年に整理され，四庫全書の中に収められている。その94巻から105巻までの「名勝」という題の下に，160の図録が収録されており，当時の名勝地，行宮，園林，寺観が描かれ，園林名勝を記録した重要な資料と言えるものである。『南巡盛典』以外に利用した一次文献は，『清史稿』[7]，『日下旧聞考』[8]，『園冶図説』[9]，『解説園冶』[10]などで，これらを用いて，皇帝が南巡した時間と路線を探り，皇帝南巡路線図を作成した。また，乾隆帝が残した詩集[11]を参考にして，1,521首の中から，江南景観に関係した詩を選択し，この詩に表現されたイメージを取り込んだと想定される頤和園の景観構成要素を抽出し，相互を対応させて整理した。さらに，皇帝が南遊した際に立ち寄った都市，すなわち南京，蘇州，杭州，無錫の景観を頤和園の景観構成要素と比較対応する方法で研究を進めた。

2.　江南の景観の影響を探る前提

(1)　江南の地理的概念とその範囲

江南の定義については，中国の学術書[12,13]の中にさまざまな規定がある。通常，江南は，長江の中下流の右岸である南のエリアを指す。即ち湖北，安徽，江蘇省の南部と湖南，江西，江蘇，浙江省一帯を指す地理的範囲で用いられるのが一般的である。本論では，江南の範囲を『南巡盛典』に書かれた皇帝の南巡路線を参考に，江蘇省の南京，蘇州，無錫，浙江省の杭州に加え，皇帝の御製詩の中で言及している江南名勝の所在地区（湖北，湖南，江西省の一部）を含む一帯に特定した（図1）。

(2)　皇帝南巡のルート

皇帝が南巡したルートは水路と陸路の2つであるが，この内の水路は「京杭大運河」であり，この運河は，中国古代の水利工事の成果である。すなわち，紀元前5世紀，春

* 東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻
** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

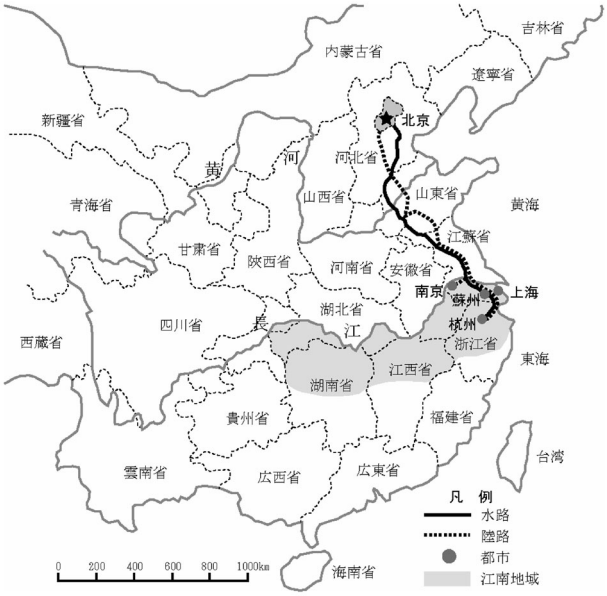

図 1 江南の範囲および乾隆の南巡路線図[14)]

秋末期に開削され，隋，元の 2 度にわたる大規模な拡張工事を経て完成したもので，総延長距離は 1,800 km に及ぶ最長の運河である。北は北京を起点に，南は杭州に至り，黄河，淮河，海河，長江，銭塘江の五大水系を貫通している。清の時代，皇帝はこの運河を視察し，運河の両岸に分布する独特の農村風景，民族文化，名勝古跡に関心を持ったとされている[15)]。陸路については，大都（北京）から出発し，水路とほぼ同じく直隷（現在の河北省），山東，江蘇，浙江を通過するルートである。この際，要所要所に宿泊・滞在を目的とする拠点としての行宮を設営し，さらに行宮の附属施設として庭園を整備している[16)]。

⑶ 江南の景観を北方庭園に取り入れた背景

江南は古来経済の盛えた地域であり，元と明の時代になると，この地域の造園は文人や詩画の影響を受け，造園芸術の質は極めて高くなったものと推察される。この時代の造園事情は，明代の造園家である計成により記された最古の庭園書『園冶』（1635 年に刊行）に見ることができる。また，清の時代になり「康乾盛世」にあるよう，それまでにない最盛期を迎えたが，これは造園についても言えた。清の初期，清の第 2 代目の皇帝となった康熙は江南を巡察し，北京に帰還後，江南の文人・葉洮と造園家・張然を北京へ招き，「三山五園」として最初に完成をみた離宮御苑「暢春園」（1687 年に完成）の計画と造営に関与させている。これが江南の造園を北の皇室庭園に取り入れた最初の例であるとされている[17)]。その後，乾隆帝（1711～1799）は，6 度[18)]に亘り，江南を巡幸し，随行した宮廷画家にお気に入りの庭園や名勝を描かせ，庭園造営の参考にしたとされる。数多くの江南の名勝・名園や造園の技法などが北方庭園の中に取り入れられているが，結果において避暑山荘，円明園，清漪園の諸園に南方の名勝や名園をモチーフないしモデルとすることで，南北造園の交流を達成している[19)]。

表 1 清漪園風景詩の整理表

作詩年代	代表的な詩のタイトル	描写内容（詩の数量）	言及した江南景観
1752	雨後御園即景	清漪園全体（24 題 24 首）万寿山（74 題 119 首）昆明湖（105 題 262 首）	江南の風景および西湖風景地
1753	万寿山即事		
1753	新春万寿山		
1752	昆明湖上		
1754	題恵山園八景	園中の園：恵山園（45 題 151 首）	錫山，恵山の風景および無錫の寄暢園
	再題恵山園二首		
1755	恵山園		
	墨妙軒		
	題恵山園叠前韵		
	再題恵山園八景		
	澹碧斎		
1770	望蟾閣	建築：①望蟾閣（14 題 14 首）②景明楼（17 題 17 首）③石舫（35 題 48 首）	詩の中に登場した江南の建築名称：①黄鶴楼 ②岳陽楼 ③不糸舟
1786	登望蟾閣		
1754	景明楼		
1755	石舫		
1752	鳳凰墩	①鳳凰墩（15 題 16 首）②耕織図エアリ（7 題 7 首）③水村居（8 題 8 首）	江南水郷および江南農村風景
1764	題耕織図		
1765	水村居		
1787	水村居口号		

3. 頤和園との関係考察

こうした皇帝の南巡に伴い，皇帝は，印象に残った江南の名勝や風景を努めて北方の庭園に取り入れた。そして，完成した庭園の風景を鑑賞しながら，逆に江南の風景に思いを馳せている。そこでここでは，皇帝が書いた清漪園における風景詩である 1127 題 1512 首の詩を整理分析することとした。具体には，江南の風景への具体が含まれていて，清漪園の全体景を詠ったものと部分景を詠ったものに分類した（表 1）。さらに，これに続いて，頤和園の景観構成要素への反映状況を抽出し（表 2），頤和園の平面図上に表示整理した（図 2）。

上記に基づき，本研究では，江南景観の影響を受けたと見られる頤和園内の景観を，⑴江南風景地–西湖からの影響，⑵江南名園–寄暢園からの影響，⑶江南の建築からの影響，⑷江南水郷風景の影響，⑸江南市街地からの影響という 5 つの側面より順に分析し，モデルとされた江南の景観を抽出した。

⑴ 江南の風景地–「西湖」から受けた影響

西湖は古来より風景の名勝地であり，前記の『南巡盛典』には，乾隆帝が南巡の際に，西湖の近くに「西湖行宮」（図 3）を建設し，ここに長く滞在して風光に楽しんだと記され

表 2　頤和園内の景観構成に見られる江南景観の影響の一覧表

頤和園内の景観	現状	原モデル（所在地）	タイプ
頤和園全体	○	西湖（杭州）	風景地
諧趣（恵山）園	△	寄暢園（無錫）	庭園
涵虚堂（望蟾閣）	△	黄鶴楼（武昌）	建築
景明楼	■	岳陽楼（武漢）	
石舫（清宴舫）	△	煦園の不系舟（南京）	
鳳凰墩	△	黄埠墩（無錫）	風景地
耕織図・水村居	■	江南農村（江南）	農村風景
小西冷	■	江南河街（江南）	河街
後溪河売買街（蘇州街）	■	江南河街（江南）	

注：○当初建設　△改築　■復元

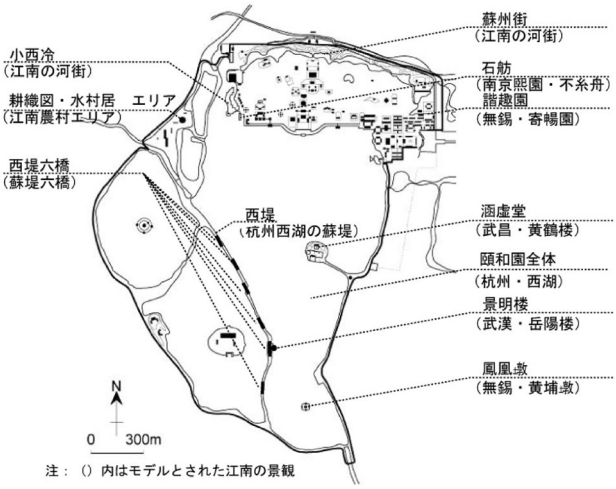

図 2　頤和園内の景観要素と江南景観の対応図

ている。また，乾隆帝が画家の董邦達に「西湖図」の長巻絵を描かせた事実は，乾隆の詩[20]の中に表現されていることから，乾隆帝は当初からこの地に杭州西湖の風光を再現することを考えていたと推測できる。また，乾隆帝の御製詩・万寿山即事には「面水背山地，明湖倣浙西，琳琅三竺寺，花柳六橋堤」と記され，清漪園（頤和園）の全体的な形状（図 4）は，西湖を模して造成されたことが判明した。

頤和園に関する既往研究の中にも，頤和園の造営に影響を与えたのは西湖であることが示されている。例えば，楊舒淇は「西湖風景は…恵州西湖と潁州西湖の景観構成に影響を及ぼし，皇室園林の代表である北京・頤和園と円明園にも，その意匠が模されている。」[21]と述べ，沈悦は「清漪園の当初計画が杭州西湖の山水を参考としており，杭州西湖の蘇堤と同じような位置関係で西堤および三つの島が造られた」[22]と述べている。さらに筆者らの既報[1]の中で，「…瓮山泊は西湖と呼ばれるようになった。その頃，西湖の湖面には蓮が植栽され，周辺の水田には稲が栽培され，湖畔に寺院や亭台などの景観ポイントが生まれ，杭州西湖を模倣した遊楽の池となった。…」と指摘している。

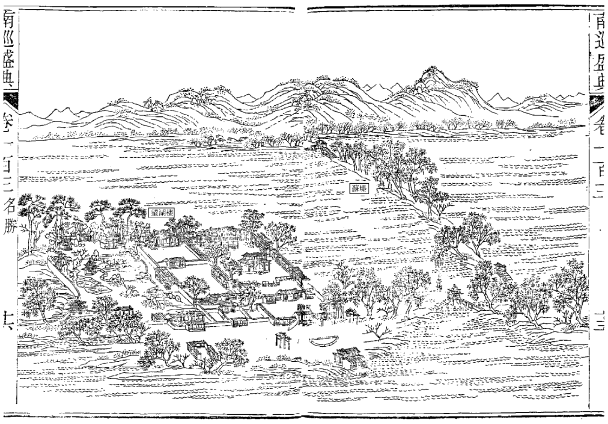

図 3　『南巡盛典』に掲載された西湖の絵図

図 4　清漪園の絵図（中国歴史博物館所蔵）

しかし，これらの歴史的な記述や既往研究では頤和園の中に西湖の景観をどのように移入したかの詳細な記述はない。そこで本論では，頤和園の性格，面積，景観構成要素，雰囲気，モチーフ，敷地周辺との関係を抽出し，モデルと想定される西湖との比較を試みた（表 3）。さらに園内景観の配置やスケールを把握するために，頤和園と西湖の平面をメッシュ図（図 5）で比較した。

頤和園と西湖を比較した結果，頤和園の全体構成上で最も重要な特徴となっている大水面が西堤により区分されている点は，原型の杭州西湖と同じである。つまり，頤和園の西堤の位置や形態，そして 6 ケ所の橋，さらに桃，柳といった植栽は西湖の蘇堤と同じであり，主要な景観構成要素も大水面，山，堤，島，建築物や構造物になっていることから，頤和園が西湖のイメージを反映したことが見て取れる。また，頤和園における広大な雰囲気と「一池三山」の神仙思想を引用する点も西湖と同じである。さらに周辺景観との関係においても眺望景観があり，園外風景の借景を取り入れている点も一致している。これらの内容を比較した結果，頤和園は西湖を写実的に模倣していることが分

表 3　頤和園と西湖の景観構成要素の比較

比較内容	北京・頤和園	杭州・西湖
性　格	皇室庭園	風景地
総面積	2.95 km^2	6.03 km^2
水　面	2.15 km^2	5.66 km^2
南　北	2.60km	3.30 km
東　西	1.95km	2.80 km
景観構成	大水面，山，堤，島 建築物，構造物	大水面，山，堤，島， 建築物，構造物
相関景観	山：万寿山 湖：昆明湖 堤：西堤およびその支堤 西堤６橋 西堤上に桃，柳を植えられ	山：孤山 湖：西湖 堤：蘇堤および白堤・金沙堤 蘇堤６橋 蘇堤上に桃，柳を植えられ
雰囲気	広々，壮大，豪放，	広々，壮大，豪放
モチーフ（思想）	蓬莱仙島（１池３山）・神仙思想を再現する	蓬莱仙島（１池３山）・神仙思想を再現する
周辺・園外風景	「３山５園」の中心に位置し，玉泉山・西山を眺望できる	北，西，南の３面が山で，東の１面が市街地であり，園外の保俶塔、雷峰塔などを眺望できる

かる。しかし，皇室庭園と自然風景地という二つの性格が異なるため，頤和園内にある人工的な建築物（105 ケ所）は西湖に比べその数は多いことが判明した。特に建築物群は，西湖の孤山（3 ケ所）より，頤和園内の万寿山（50 ケ所）に集中していることが確認された。

また，メッシュ図で頤和園と西湖の規模を比較した結果，西湖の全体的な面積は頤和園の 2.04 倍であり，西湖における蘇堤の長さ（2,600 m）は頤和園の西堤（1,600 m）に比べ，約 1.6 倍が長くなっていることが明らかとなった。しかし，重要な景観構成要素となっている西湖の孤山と頤和園の万寿山の面積を比較した結果，万寿山が孤山より 2.8 倍大きくなっていることが判明した。

⑵　江南の名園・寄暢園から受けた影響

『乾隆皇帝詠万寿山風景詩』の中に，恵山園に関する詩が多く見られる。ここでは，乾隆皇帝が 1754 から 1796 年の間に書いた恵山園に関する 45 題 151 首詩の中から，関連の部分を抽出することで寄暢園を模倣したことを確認した。具体的には，1754 年の題恵山園八景と題する詩の序文で，「江南の各名荘の中で，恵山の秦園が一番古く，我が先祖が寄暢と名を付けた。私は辛未（1751）年春の南巡の際に，当園の優雅な雰囲気が気になって，図を持ち帰った。その園の意を真似し，万寿山の東側に恵山園を建設した。……」との記述があり，寄暢園の造園意匠を模したことに満足し

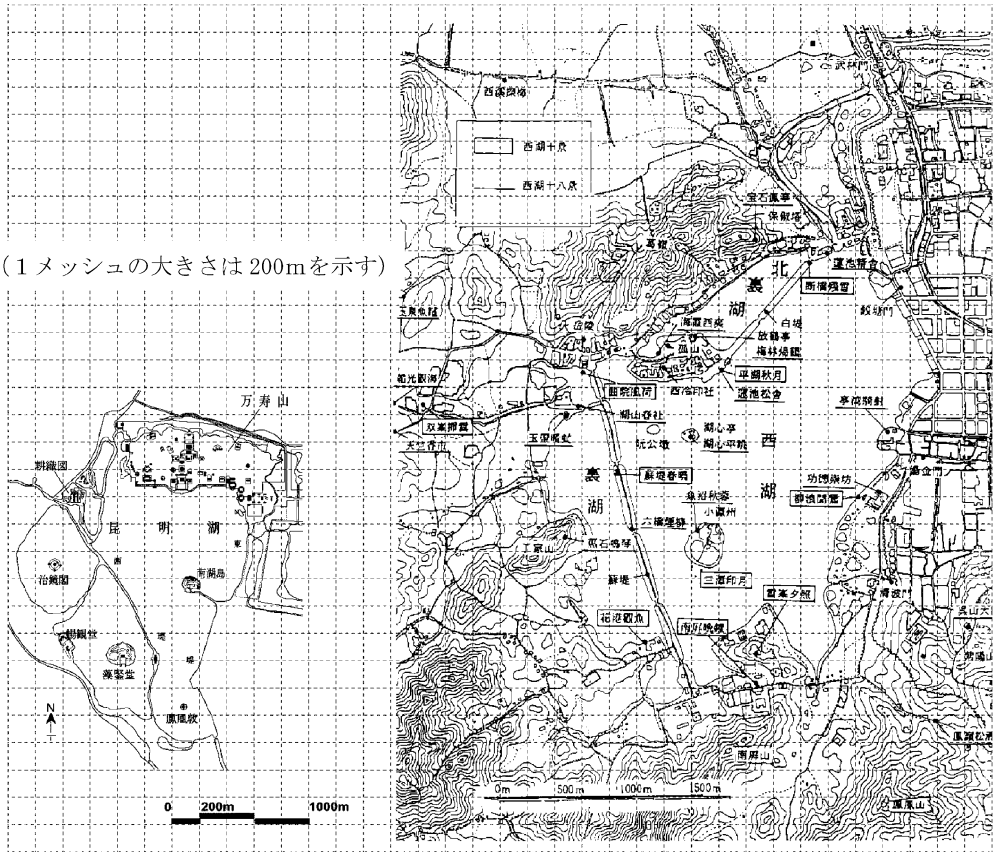

図 5　清漪園と西湖の規模比較図[23]　（佐藤　昌・『中国造園史（下）』における清の時代の西湖平面図より作成）

図 6 『南巡盛典』に掲載された「寄暢園」の絵図

ている様子が窺える。一方，モデルとされた寄暢園は長江南岸にある著名な庭園で，無錫の恵山東麓に位置する。「園中園」（庭園中の庭園），「湖中湖」（湖中の湖），「島中島」（島中の島）などの造園手法は数多くの中国庭園に見られるが，寄暢園においては，この内の「園中園」と「借景」の手法を採用した典型的庭園であり，恵山九峰，錫山龍光塔など園外の景物を巧みに取り入れて造庭している。乾隆帝の第一次南巡（1751 年）の際，この無錫の寄暢園を訪れ，この庭を讃美した詩を詠じ，随行の画家にこの園を模写させている（図 6）。そしてこの園を万寿山の麓に再現して，恵山園を造成したことになる。

当時の園の模様は『日下旧聞考』によれば，「恵山園の規制は寄暢園に倣い，万寿山の東麓に建つ，……恵山園の門は西向し，門内の池は数畝なり。池東を栽時堂と為し，其の北を墨妙軒と為す。園池の西は就雲楼と為し，稍々南を澹碧斎と為し，池の南折れて東に向うを水楽亭，知魚橋と為す。就雲楼の東を尋詩径となし，径の側を函光洞と為す。北に廻れば打斎清軒と為し，軒後に石峡あり，其の北は即ち園の東北門なり。」[24] とある。即ち，園の南方の大池を中心とした庭で，池の東，南，西の三面に建築物を配して，池の北面には建築物は少なく，そこには大型の湖石の假山を主景とし，假山の西は地形を利用して水流を造って玉琴峡と名づけた。この玉琴峡は寄暢園の「八音澗」に倣したものである。

文献[25,26] と既往研究[27] を参考に，ここでは恵山園と寄暢園の景観構成要素を明らかにすべく，比較作業を行った（表 4）。さらに二つの庭園の配置やスケールを比較するために，平面をメッシュ図（図 7）で示した。

このような比較を試みた結果，清漪園期における恵山園と，そのモデルとみなされる寄暢園の共通点と相違点が次にように明らかになった。① 場所の選択の点から見れば，恵山園は万寿山の東麓に位置し，万寿山を園内に借景することが出来る。一方，寄暢園は恵山の東麓に位置し，その恵山と南東部にある錫山を園内に借景することが出来る。② 恵山園（霽清軒エリアも含む）の全体面積は寄暢園より大きいが，池及び池の周辺に建築を主題にした点で同じである（写真 1）。③ 園内の建築物は，恵山園の方が寄暢園より多いことが確認された。恵山園には 20 ケ所の建築物があり，寄暢園にはその半分の 10 ケ所であることを明らかにした。なお，この恵山園は嘉慶 16（1811）年に拡張改造され，名称も諧趣園（写真 2）に改名されている。その後 1860 年の英仏連合軍によって破壊されたが，光緒 18（1892）年に再建された。建築物の名称も恵山園時代と異なり，多くの建築物が付加された。主な改建は，① 南の池の周辺は一部分を除いて，すべて廻廊によって連結したこと，② 南部の小島を廃して，知春亭及び引鏡亭を造ったこと，③ 涵遠堂の東北に霽清軒を新築したことである。

表 4　恵山園と寄暢園の形成要素の比較

比較内容	清漪園内の恵山園	寄暢園
建設年代	清朝(1751 年)	明朝(1592 年頃)
庭園性格	皇室庭園の園中園	私家庭園
所在位置	万寿山の東麓	恵山の東麓，錫山の北西
庭園面積 池の面積 池の面積率	全面積：1.2ha 水面：0.4ha 庭園の 33%を占める	全面積：3,996 ㎡ 水面：679.3 ㎡ 庭園の 17%を占める
景観構成	大水池，周辺に建築	大水池，周辺に建築
特徴的な景観	玉琴峡、清琴峡 知魚橋	八音澗 七星橋
主要な造園手法	借景，水景，叠石(太湖石を使用)，築山	借景，水景，叠石(黄石を使用)，築山
建築物・色使い	20 所 鮮やか(赤，黄色など)	10 ヶ所 素朴(白，灰色など)

写真 1　（左）無錫の「寄暢園」（2005 年筆者撮影）
写真 2　（右）頤和園の「諧趣園」（2005 年筆者撮影）

(3)　江南の建築から受けた影響

頤和園の景観構成における建築物と工作物の種類は，亭，台，楼・閣，橋，舫などに分類できる。ここでは，江南の建築等に影響を受けたと思われる頤和園の楼，舫を対象に考察をすすめた。

a)　清漪園期における江南名楼・黄鶴楼の影響

中国では，古来有名な景勝地には楼閣があり，その美を表現している。武昌の黄鶴楼，南昌の藤王閣，洞庭湖畔の岳陽楼は江南の三大名楼として知られるが，楼閣上からの眺望はもとより，その姿と形の美しさから楼閣は景観の象徴物となっている。庭園造成初期の清漪園期には，武昌の

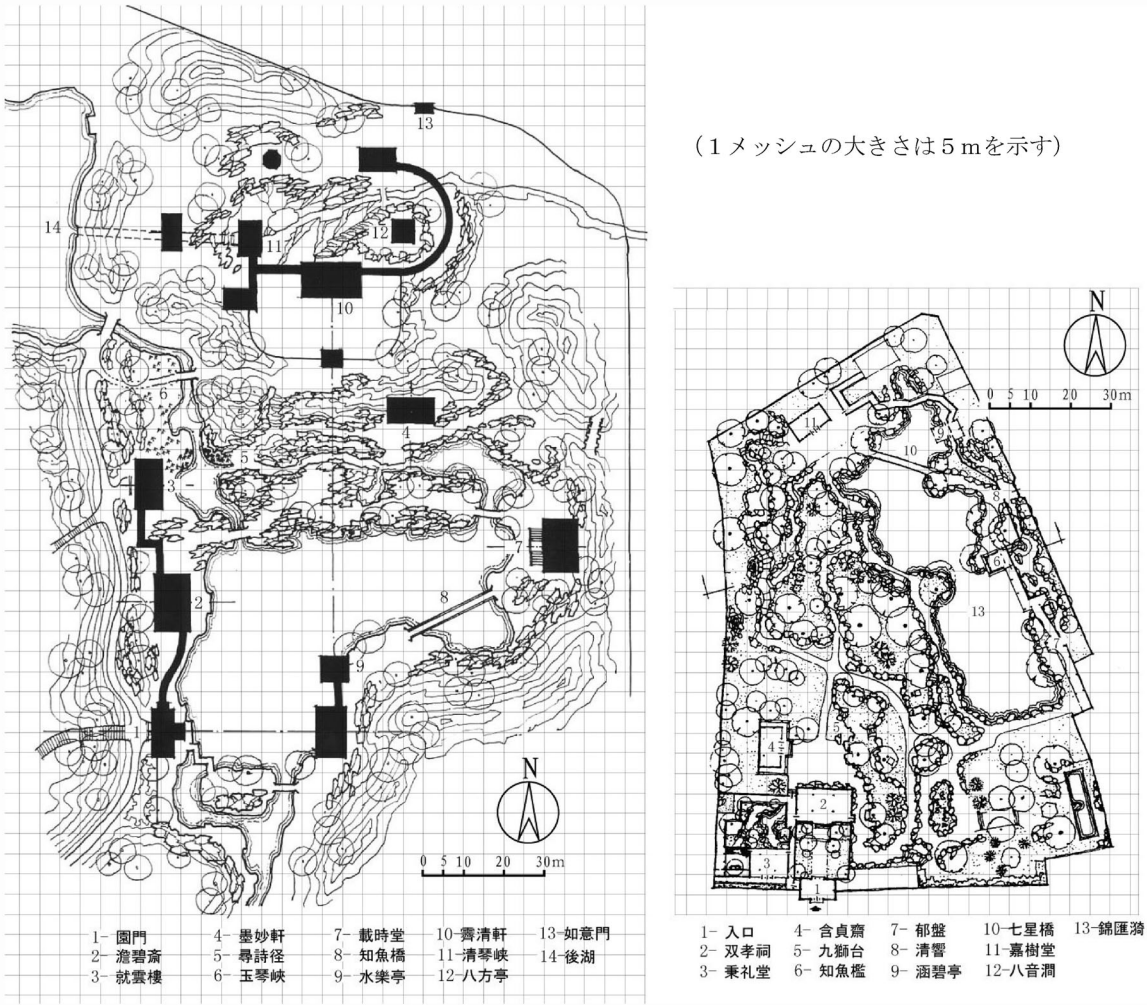

図 7 「恵山園」と「寄暢園」の規模比較図[28)]

黄鶴楼を手本とし，龍王廟島（別称南湖島）に望瞻閣が築造されている。『乾隆皇帝詠万寿山風景詩』には，当時の望瞻閣を詠じた 14 題 14 首の詩がある。その内，皇帝が乾隆 35（1770）年に作詩した望瞻閣には「名曰望瞻閣……制規黄鶴楼」（名は望瞻閣と言う……体制規模は武昌の黄鶴楼を模した」とあり，乾隆 51（1786）年作詩の登望瞻閣極頂作歌には「望瞻閣の建設には武昌の黄鶴楼の 3 層構造の木造材料を参照した」とある。しかし，この望瞻閣は光緒 18（1892）年の改築の際に涵虚堂と改名され，二層構造に造り変えられている[29)]（図 8）。

一方，モデルとなった黄鶴楼は湖北・武昌の長江右岸にあり，長江を見下ろすことのできる高台に位置した楼閣である。昔の黄鶴楼は，「三層，高さ 9 丈 2 尺もあり，（10 尺が 1 丈になり，1 丈が約 3.3 m になる。）7 尺の銅頂を加えて，寸法上 9 丈 9 尺，中国人の最も尊ぶ九の数字になっている」と『中国園林建築』[31)] に記録されている。しかし，この建築物は戦火により消失し，現在の黄鶴楼は，1985 年に新築したもので，現在の黄鶴楼は五層であり，3 m の瓢箪形の屋根を頂き，高さ 51.4 m と昔の黄鶴楼より約 18.7 m も高く，大規模なものになっている。

b） 清漪園期における江南名楼・岳陽楼の影響

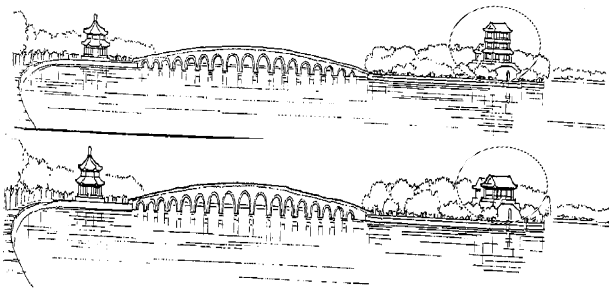

図 8 清漪園期の三層の望瞻閣と頤和園期の二層の涵虚堂[30)]

頤和園内の西堤南部の転折部に景明楼が設けられている。清漪園期にはこの景明楼が二層の楼閣で，両面が南湖と西湖に面し，李白の「両水挟明鏡」の詩意を受けて，前述した江南名楼の岳陽楼を参考にして建設したものであり，乾隆帝はこれに登って，詩を詠じている[32)]。ここからの景観は，北は南湖島と十七孔橋を望み，遠く前山の仏香閣が聳えているのを眺められる絶景であった。一方，モデルとされた岳陽楼は一千年余の歴史があり，北宋の著名な文人である範仲淹が，岳陽楼記の中で「天下の憂いに先ん

表 5　清漪園期における不系舟と石舫の比較表

比較内容	不系舟	石　舫
建設年代	1746 年	1750 年
方　　角	南北	南北
材質構成	底部：石材 舟体：木材	底部：石材 舟体：木材
舟体の長さ×幅（m）	14.50×4.63	36.00×5.05

写真 3　（左）南京の不系舟[34]
写真 4　（右）頤和園の石舫（2003 年筆者撮影）

じて憂えい，天下の楽しみに遅れて楽しむ」という名文を書いたことから，岳陽楼はさらに有名になった。『中国園林建築』によると，現在の岳陽楼は清・光緒（1875-1908 年在位）年間に建設されたものであり，三層の木造建築である[33]。

c）　南京・煦園の不系舟と頤和園の石舫

『中国園林建築』によれば，「舫」という建築様式は中国の江南地方で誕生したものであり，これは船の造型をモチーフに建てられた建築物の一種で，水の風景を楽しむことを目的としたものである。船の形をしているにも関わらず，動くことの出来ない特徴から「不系舟」と称された。江南名園に見られる代表的な石舫としては，蘇州の拙政園にある「香洲」と南京の煦園に造られた不系舟が挙げられる。ここでは，乾隆皇帝の御製詩から石舫に関する詩を 35 題 48 首抽出し，江南庭園に見られる舫が清漪園に採用されたのかどうかを考察した。

皇帝は詩の中で，石舫を「不動」の意味として取り上げており，「自分の権力や地位などが石の舟のように永遠に存在している」と述べ，また，年に一度，石舫に登り江南風景にも似た周辺景観を楽しんだことを詩の中で詠っている。ここでは，清漪園の石舫と南京の不系舟が酷似している点に注目し，これら二つの建設時期や構成素材を調査し，これを比較した（表 5）。その結果，南京・煦園の不系舟（写真 3）と清漪園の石舫は，建設年代，方角，材質構成，規模の点で類似していることが判明し，清漪園の石舫は，江南の「不系舟」を模倣したものであることを推察した。なお現在の頤和園に置かれた石舫は，1893 年に改造されたもので，基本的な構造は変わらないものの，舫の船体上屋部は脱中国風である（写真 4）。

⑷　江南の水郷風景から受けた影響

a）　鳳凰墩と黄埠墩の関係

頤和園の景観構成において，江南の水郷風景から受けた影響をここでは考察したい。江南の水郷風景をモチーフとしたものは，昆明湖南端にある鳳凰墩である。鳳凰墩は，頤和園南部の重要な風景点であるが，これは無錫の大運河の中にある黄埠墩をその手本としている。乾隆 17（1752）年から乾隆 60（1795）年までの皇帝の御製詩の中には鳳凰墩を題材に 15 題 16 首の詩が納められている。無錫の黄埠墩をモデルにしたことが 1752 年，1757 年，1781 年作詩した詩のタイトル・鳳凰墩と 1795 年作詩の鳳凰墩口号の中で示されている。ここで詩の中に「渚墩学黄埠，上有鳳凰

写真 5　（左）大運河の中の黄埠墩[35]
写真 6　（右）昆明湖の中の鳳凰墩（2004 年筆者撮影）

楼」（本墩は黄埠墩を学ぶ，上に鳳凰楼が有り）とあり「忽疑遊恵麓，渓泛憶従梁」（突然に恵山を遊覧している気がして，梁渓のことを思い出す）と昆明湖・鳳凰墩の雰囲気が無錫大運河の黄埠墩と似すぎて，錯覚を起こしてしまうくらいであると語っている。モデルとされた黄埠墩（写真 5）は，小さな円形状の島で，面積は 220 m^2 で，別名を小金山という。その中に垂柳に囲まれた仏寺があり，遊覧客が好んで登臨する場所である。この黄埠墩の西には恵山，錫山がひかえ，その頂上には龍光塔がある。その風光は頤和園の鳳凰墩（写真 6）の北西に西山及び玉泉山があり，玉泉山上には玉峰塔が聳えているのと類似している。

b）　耕織図・水村居エリアの景観構成に与えた影響

皇帝の詩集[36]によれば，清漪園時代における昆明湖の北方は，菰，葦，蘆等が繁茂し，水禽が飛来するような江南の風光の趣が豊かな場所であった。ここに乾隆帝は，耕織図という江南の民家風の建築を造ったわけであるが，これは農耕を重んじた皇帝の意図からであった。このエリアに廟宇，住居，染織作坊，蚕房，桑園を置き，毎年蘇州，杭州及び江寧の三地域から南匠と称する技工百余名を呼び寄せ，作業に当らせたとされている。乾隆帝は，この地を愛し，中に延賞斎という書斎を設け，そこを読書，観画を楽しむと同時に，辺りの水辺で釣魚を楽しんだ[37]。しかし，その後，光緒が頤和園を修復することになるが，耕織図は廃址のまま放置されていたので，外壁の建設に合わせて，これを敷地外にした。1990 年以降，頤和園の景観は序々に復元，修復され，耕織図エリアも 2003 年に再び敷地内に取り込まれることになった。写真 7 は 2003 年に新建されたものであり，江南農村の風景を再現したものとなっている。しかし，環境も変わった今では，この江南風景は，清漪園期における江南農村風景を描いた皇帝の詩を読み，想像するしかない。一方，水村居（写真 8）は，養水湖の西岸に沿った隆起した丘の上に造られた開放的な小園林建築群

写真 7 （左）新健された耕織図エリア（2003 年筆者撮影）
写真 8 （右）水村居エリアの風景（2003 年筆者撮影）

写真 9 （左）-蘇州の周荘水郷（2004 年筆者撮影）
写真 10 （右）-頤和園内の蘇州街（2004 年筆者撮影）

からなっていて，ここからは万寿山及び西山，玉泉山並びに西方の田園地帯が眺望でき，かつて乾隆帝は秋の収穫時に詞臣と共にここで宴を催し，歌を詠み，農民が収穫に汗を流す姿を眺めたと言われている[38]。

⑸ 江南市街から受けた影響

中国の江南，特に蘇州，楊州一帯には水路が数多く分布しており，この水路の両側には高さ，大きさの異なる建築物が建ち並び，独特の町並みを形成している。水路には，小船が往来し，アーチ橋が架けられ，賑やかな生活の景が展開する。この光景は「河街」と言われ，古くから中国の絵師や画家に好まれた。代表的な作品として，宋の時代の張択端の絵画，「清明上河図」[39]の長絵がある。清の乾隆帝は蘇州，揚州に巡察する際に，このような「パノラマ風の長絵」式に連続する空間を表現しているが，この手法を清漪園の造営にも取り入れている。清漪園には江南市街の雰囲気を再現したエリアが二ケ所造られている。一つは万寿山の西麓，昆明湖から後湖に繋がる運河沿いの「小西冷」であり，もう一つは，後山後湖の「蘇州街」である。「小西冷」は約 100 m の町並みで，「一路一河」の形式をとり，河の片側に沿って建物が連続に建てられ，風景が展開しているものである。一方，「蘇州街」は「一河両街」の形式で，河の両側に建物が連続的に並ぶ形式である。その長さは約 200 m で，清漪園期には，綢緞店，宝石店，酒舗，茶楼，骨董品店，雑貨店などが設けられ，後宮に仕える宦官がこれを開業し，皇帝皇妃は客となって買物をし，また，茶楼に登って附近の風光を楽しんだとされる。この街には宮廷人も喜んで逍遥し，その結果，頤和園内に江南の典型的な川沿いの街並み（写真 9）が再現された。しかし，この「蘇州街」は二度に渡る戦争により破壊されたが，1990 年北京市により修復された。現在，この地区の一部は一般に開放されており，江南の「河街」風景を再現した状況である（写真 10）。

4. ま と め

『園冶』[40]の中に「造園は 3 分の匠と 7 分の主人」と記されているが，これは，「作庭において，その成果の 3 割は庭師の技法に左右され，7 割はその園の主人の素養や能力に従う」ということを意味している。清漪園期の主人は，乾隆皇帝であることから，庭園の造営は彼の意志により園の 7 割が決定されたということになる。皇帝が南巡したことにより，江南の景観を再現する意図が高まり，結果的に造営された清漪園の中にこれが反映されている。本研究は，乾隆皇帝の南巡した足跡と清漪園の風景を眺めた時の皇帝の心境を辿りながら，当初における清漪園の計画造営に際して，皇帝が江南の名勝風景地，名園，建築，水郷風景，市街地から受けた影響がどのように庭園に反映されたかを考察した。研究の成果を以下のようにとりまとめた。

① 江南の名勝風景地-西湖との景観構成要素の比較から，清漪園（頤和園）は，万寿山・昆明湖を中心に西堤六橋を景観要素に加え，西湖の形を取り込みながら写実的に模倣していることが明らかとなった。同時に，万寿山の景観を建築物で充実させ，後山後湖に見られる蘇州街などの景観のように，その独自性ある演出に成功した。

② 江南の名園・寄暢園と清漪園内の恵山園との景観構成要素の比較から，「園中園」の造園意匠を巧みに導入し，かつ借景などの共通点をみるなかで，無錫の寄暢園をモデルにしたことを明らかにした。また，恵山園は無錫の寄暢園の単なる模倣ではなく，皇室庭園に合わせた建築の数量や色使いなどの相違点が明らかとなったことから，寄暢園をさらに発展させたものであると考察した。

③ 頤和園内の代表的な楼，舫を抽出し比較した結果，清漪園を造営する際には，十分な財力と皇帝の強い権力に支えられ，江南の名楼，名舫などの建築を取り入れたことを明らかにした。

④ 鳳凰墩，耕織図および水村居エリアは，江南の水郷風景と農村風景をモチーフとしたものである。鳳凰墩は江南の大運河の風景を再現し，耕織図および水村居エリアは江南農村の雰囲気を再現したものと考察した。

⑤ 「小西冷」および「蘇州街」に見られる江南の市街地も清漪園（頤和園）の中に再現されていることが確認できた。「小西冷」は「江南河街」における「一陸一河」の形式で登場し，「蘇州街」は「一河一街」の形式で江南の市街風景を表現している。

以上，本論文では北京・頤和園の景観構成に見られる江南景観の影響を 1）江南の名勝風景地からの影響，2）江南名園からの影響，3）江南建築からの影響，4）江南水郷風景からの影響，5）江南市街地からの影響を順に考察した。このようにして，5 つの側面から頤和園の景観構成に見られる江南景観の影響を解明した。

補注及び参考文献

1） 祝 丹・養茂寿太郎，2005，北京・頤和園の敷地計画に見る歴史的積層性の研究，ランドスケープ研究 68（5），425-

430.
2) 清華大学建築学院編, 2000. 頤和園, 中国建築工業出版社, pp. 16-78.
3) 北京市園林局頤和園管理処編, 2000. 頤和園建園 250 周年記念文集, 五洲伝播出版社, pp. 1-341.
4) 沈　悦・熊谷洋一・下村彰男・小野良平, 1997. 北京頤和園における景観形成と西湖景観の影響について, ランドスケープ研究, 60 (5), 577-582.
5) 楊舒淇, 1999. 中国杭州の名勝「西湖十景」の成立と発展ならびにその日本への影響に関する研究, 東京農業大学学位論文, 1.
6) 高晋等集 (清), 1996. 南巡盛典, 北京古籍出版社, 第一巻-第百五巻.
7) 趙爾巽等纂 (清朝), 1976. 清史稿, 中華書局出版, 巻二百十四-巻二百二十四, 志九十三.
8) 于敏中等編纂 (清朝), 1981. 日下旧聞考, 北京古籍出版社出版巻, 八十四.
9) 計成 (明) 趙農注訳, 園冶図説, 山東画報出版社, 1-55.
10) 計成 (明) 上原敬二, 解説園冶, 加島書店, 1-43.
11) 孫文起等, 1992 年. 乾隆皇帝詠万寿山風景詩, 北京出版社, 1-522.
12) 餞大昕 (清), 1983. 十架斎養新録-江南, 上海書店, 245.
13) 周振鶴, 1992. 釈江南, 中華文史論叢, 第 49 輯.
14) 中華人民共和国地図 (2005 年版) より作成.
15) 前掲書 6), 第九十四-第百五巻.
16) 前掲書 6), 第一巻.
17) 周維権, 1999. 中国古典園林史 (第 2 版), 清華大学出版社, 346.
18) 6 度の年代は : 1751 年, 1757 年, 1762 年, 1765 年, 1780 年と 1784 年を指す.
19) 佐藤　昌, 1991. 中国造園史・中巻, 229-337.
20) 前掲書 11), 498.
21) 前掲書 5), 1.
22) 前掲書 4), 580-582.
23) 清漪園の平面図は前掲書 1) の平面図より作成し, 西湖の平面図は前掲書 19) の清代における西湖の平面図より作成した.
24) 前掲書 8), 巻八十四, 1400.
25) 黄茂如編著, 1994. 無錫寄暢園, 人民日報出版社, 1-136.
26) 楊鴻勛著, 1994. 江南園林論, 上海人民出版社, 13-277.
27) 馮鐘平, 1982. 諧趣園と寄暢園, 建築史論文集, 第 5 輯.
28) 前掲書 17), 427 の「恵山園平面図」と前掲書 26), 89 の「寄暢園平面図」より作成.
29) 前掲書 3), 18-19.
30) 前掲書 3), 19 の図より引用.
31) 馮鐘平編著, 2000. 中国園林建築 (第 2 版), 清華大学出版社, 5-200.
32) 前掲書 11), 502-507.
33) 前掲書 31), 280.
34) 那剣卿 2003 年 12 月 2 日に撮影, 中国新聞ネット : http://www.chinanews.com.cn/n/2003-12-02/26/376174.html
35) 太湖明珠ネット, 2005. 無錫の古運河, ホームページ : http://www.thmz.com/html/col82/guyunhe/
36) 前掲書 11), 475-477.
37) 前掲書 11), 478-480.
38) 前掲書 11), 481-483.
39) 中国建築科学研究院, 1982. 中国の建築, 中国建築工業出版社, 小学館, pp. 92-93.
40) 前掲書 10), 23.

A Study on the Landscape Composition of the Summer Palace in Beijing in Relation to the Influence of the Jiangnan Region Landscape

By

Dan ZHU*, Masato JINDO** and Toshitaro MINOMO**

(Received November 22, 2005/Accepted March 10, 2006)

Summary : The subject of this research is the landscape composition of the Summer Palace in Beijing, which was influenced by the landscapes of "Jiangnan", the southern region of Yangtze River, and their mutual relationship. The research investigates the extent to which and in what ways the Qianlong emperor took Jiangnan beauty spots and landscapes into consideration when designing and constructing the Summer Palace. The research was carried out with a focus on document studies of primary documents, historical materials, existing research, poetry anthologies and picture maps, while the reality was confirmed by on-site study. Specifically, the influence of various Jiangnan landscapes on the landscape composition of the Summer Palace is elucidated from five perspectives, namely, influences from : 1) Jiangnan beauty spots, 2) Jiangnan famous gardens, 3) Jiangnan architectures, 4) Jiangnan water vistas, and 5) urban Jiangnan.

Key words : Summer Palace, Landscape composition, Jiangnan landscape, Chinese garden, Qianlong emperor, Southern Tours

* Department of Landscape Architecture, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture
** Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture